

## 挑発する「羅生門」

### 教材観の変革

芥川龍之介の「羅生門」は、何度読んでもその度に刺激され、挑発されるテキストである。近年は高等学校『国語Ⅰ』の共通教材として、否、日本人の十代半ばの少年少女のほとんどが教科書を通して学ぶ国民教材として、位置づけられるようになった。そこでこの作品の教材としての魅力、その挑発性に関して考えようとするのが、本稿のねらいである。

「羅生門」は小説とは何かを考えるのに格好の素材としてよい。教科書がこの小説を教材として取り上げるのも当然のことなのである。ところが折角多くの教科書が「羅生門」を採用しても、高校の教育現場の一部には、この作品の教材としての価値に疑問を呈し、中には「羅生門」が載っていない教科書を、それゆえに評価するという笑い話めいた話すらある。教科書会社の一部には、そうした現場の声を反映させようとして、同じ作者の「蜜柑」と

### 関 口 安 義

差し替えた教科書を作ってもいる。「蜜柑」も決して出来ない作品ではない。が、これは雑誌『新潮』（大正8・5）に「沼地」といっしょになって「私の出遭った事」というタイトルで載った事情が示すように、小説というよりもエッセイに近いものである。高校一年の小説入門といった単元に不向きであることは言うまでもない。

では、一部の教育現場での「羅生門」不評の原因は何なのか。大別して次の二つにまとめられる。その一つは、「こういう暗いネクラな作品は、現代の高校生は受けつけない」というのであり、いま一つは、「主題が一つにしぼりきれず、指導がやりにくい」というのである。双方ともそれなりの理由がある。前者にはこれまでの学界での作家芥川や作品「羅生門」評価が、とかく〈虚無〉〈老成〉〈世紀末〉などの評言を伴いがちで、陰鬱な主題を読もうとしていたことにかかわる。後者は受験国語での正解は一つ、主題は一つといった風潮に毒された考えと言えようか。そしてこの二つは複雑にかかわりあって存在する。ここに教材観の変革と

いう、大きな課題が浮上するのである。この問題を第一に押さえておきたい。

大学入試を頂点とする入試体制は、現在の日本の教育を蝕<sup>じく</sup>んでおり、それは高校国語教室にも及んでいる。正解は一つ、それにいかに早く近づけるかという管理的授業がまかり通っているのである。それを正解到達方式の授業と呼んでおこう。プロセスを切り捨て、あらかじめ決められた一つの解答にしゃにむに向かうのが、よい授業だとされる行き方である。「羅生門」の指導において、「この小説で作者が言いたかったことは何か」という問いがあり、「人間のエゴイズムです」と答えさせるのは、その典型である。

こうした受験体制下の正解到達方式の授業を支えてきたのは、実はこれまで無批判に摂取されてきた垣内松三・石山脩平らの国語教育解釈学理論にあったことも、指摘しなくてはならない。この理論においての教材とは、学習者の外側に客観の対象として存在するものとされる。読み手としての学習者は、そこに隠されているとされるテーマを掘り起こすことに躍起となる。つまり指導者の立てた一定の手続き、指導過程に従って、対象とされる教材を分析・追尋していくならば、自ずと主題は明確になり、学習者の読解が成立すると考えられてきたのである。例えば石山脩平『教育的解釈学』（賢文館、昭和10・4）の第三篇第五節「精読段階の任務」には「主題の探求・決定」の項があり、「精読段階の中心的課題は全文の主題の探求決定である」とし、「作者が原体験を素材としてそれを表現の想にまで構成するに当つて、何を意図

し、如何なる価値方向に導かれて、それを成したかといふ点の考察である」という文面が見られる。

ここでは何よりも作者が大切にされ、「精読」の課題は、作者が「何を意図」したかをさぐり出すこと、即ち主題の探求と決定にあるのだとされている。ここでは読み手としての学習者が、テキストそのものに入り込み、体験し、理解するといったことは、一切排除されている。——ここに現在の国語教室を支配している、指導者が読解し、理解したものを学習者に一方的に伝授するという管理的国語教育を許容するものがあるのだ。さらには正解を一つにしほり、他はすべて切り捨てる受験国語の出題方法を支えてきたのも、この理論であつたといえよう。

では、どうしたらよいのか。それには〈主題〉指導からの離陸を目指すことであり、過去の国語教育解釈学理論の呪縛からの解放が必要である。ことばを変えるなら教材観の変革が求められるのだ。〈読み〉の授業の転換である。世界的に見ても今日〈読み〉の理論は動きつつある。日本でも文学研究の領域では、近年読むという行為が反省され、読者の役割に注目する立場が一段と強くなっている。作品を読むとは、楽譜を演奏するようなものであり、読み手が読むという行為を通して、テキストを加工したり、充填したりする行為だといふのである。H・R・ヤウス『挑発としての文学史』（岩波書店、昭和51・6）やW・イーザ『行為としての読書』（岩波書店、昭和57・3）の出現は、この傾向に一役買っているように思われる。

ヤウスは「文学作品は、それ自体で成り立っている客体などで

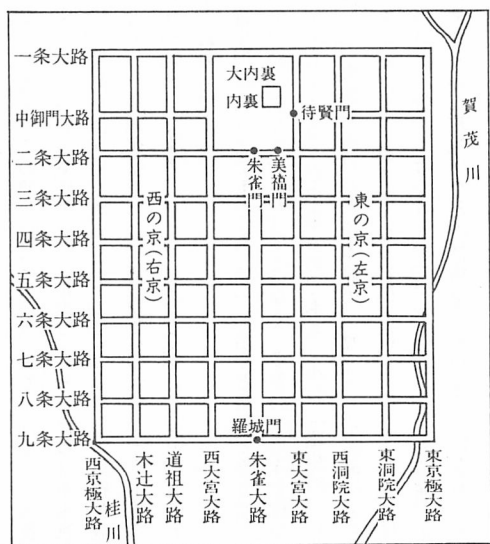
はなく、どの時代のどの観察者にも同様の姿を示すことはない」とし、「それはむしろ、総譜のようなもので、読むたびにいつも新たな共鳴をおこす」と言う。早くサルトルは『文学とは何か』で「あらゆる作品は呼びかけである」と言ったが、ヤウスはここで「文学作品の対話的性格」を指摘する。一方、イーザーは右の本で文学作品の《読み》とは何かという課題に明快な方向性を示す。イーザーは文学のテクストが、さまざまな意味づけを許容するものであつて、数学や法律のことばとはちがつて、あいまいで多義的な意味を持ったことばで構成されていることをはっきりさせ、「テクストと読者の相互作用」を説く。「――不確定なところがあるからこそ、読者はテクストの意図を理解し、それに形を与えてみようという気持ちを起こす」とイーザーは言うのである。

教材観の変革があるところ、「羅生門」というテクストはさまざまな様相を示す。それは読み手である学習者を挑発してやまない。《読み》とは、学習者が想像力<sup>イマジネーション</sup>を発揮して作品世界を創造<sup>クリエイト</sup>するものなのである。こうした点を押さえた上で、「羅生門」の《読み》を考えてみることにする。

### 境界の意味を問う

これまでの「羅生門」指導は、段落に分け、各段の大意を押さえ、語句の意味を解釈し、主題を問うというのが大勢であつた。そうした指導を離れ、テクスト「羅生門」の挑発するものを汲み取る《読み》は、どのようにあるべきか。新しい教材観に立った指導者各自の創意工夫が求められるのである。ここではわたしな

りの《読み》を示してみよう。  
まずはこの小説における《境界》の意味を問うことから始めたい。



平安京略図

右の平安京略図を見てほしい。大内裏から南に向けて真っ直ぐに広い道路が走っている。それが朱雀大路である。この道をはさんで東を東の京（左京）、西を西の京（右京）と呼んだ。東に賀茂川が、西に桂川が流れている。

平安京には東西に一条から九条までの大路があつたが、一番南の九条大路が朱雀大路と交わる京外との境に羅生門は建っていた。

文献によれば大きな門である。羅城門とも書いた。羅城とは「城を羅らす」、つまり都市の周囲をかこんだ城壁の意味である。門の内外に溝が掘られ、橋が架かっていた。溝の幅は三メートル、東西に羅城が続く。門の内側に九条大路が、外側には門外大路があった。羅城門の外はそのまま鳥羽作道（鳥羽街道）に通じていた。文字通りの洛外から洛中へ入るための境界に、この巨大な建物はあった。

洛中第一とされたこの大門は、二重閣（二階建）で朱塗り、正面約十六メートル、前後にそれぞれ五段の石段があった。屋根は瓦で棟の両端に鴟尾（しび）が取り付けられていた。羅城門と書いた額が掲げてあったという。また楼上には最澄の作と伝えられる八臂の毘沙門天を安置して、王城の護にしたとも伝えられている。平安時代末期の羅生門は、都の衰微とともに荒れ果て、楼上には鬼や強盗が住み、死体の捨て場所にもなっていたとは、『今昔物語集』などにも見えるところだ。一九五〇（昭和25）年に黒沢明監督によって「羅生門」と題された映画が作成されたが、現存する復元スチール写真に、その片鱗をうかがうことができる。

小説「羅生門」の舞台は、この荒れ果てた門である。テキストはそれをまず「所々丹塗りの剥げた、大きな円柱」でもって示す。もはやかつての王権の象徴とは見えないほど門は荒廃している。そのため京の入り口、九条の朱雀大路にありながら、雨やみを待つ者は「一人の下人」きりではない。荒廃の理由は、「この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災（わざ）がついて起つた」ことに求められている。その上で「方丈

記」のよく知られた箇所を下敷きにして、「仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたに積み重ねて、薪の料に売つてゐたと云ふ事である」との説明が来る。京都の町のこのような一方ならぬ荒れようが語られた後、「洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨て、顧る者がなかつた」と視点は再び門に戻る。

小説の舞台は、「狐狸が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄て、行くと云ふ習慣さへ出来た」とされる気味の悪い羅生門である。そこは本来京への入り口の役割を担う場であったが、ここではさらに狐狸・盗人・死人といった難題が横たわり、通過するのがいっそう困難な関所の意味が加わつて来る。つまり境界の役割は、より強化された形で示されるのである。

羅生門は言うまでもなく、第一に洛中と洛外とを分かつ境界である。が、決してそれだけではなく、多義的な意味を持つものとしてとらえることが出来るのである。小説「羅生門」における〈門〉の機能に着目した松本修の「媒介としての門」(Grüne Brücke, 紀要) 1 昭和58・12 に従えば、ここでの境界とは、洛中と洛外とを分かつばかりか、「中心と周縁、秩序と混沌、生と死、日常性と非日常性」などの性格をも読めることになる。わたしは前著『芥川龍之介 実像と虚像』(洋々社、昭和63・11・15)で、束縛と解放の〈境界〉として羅生門を位置づけた。

この〈境界〉をより鮮明にするために、テキストは「日暮」とか「雨」とか「黒洞々たる夜」など、時刻や自然現象を援用して

いる。それによって門の境界性は、いっそう強まるのである。小説「羅生門」は、羅生門という「境界」をいかにして通り抜け、別世界に入るかの物語なのである。

### 老若の対立を読む

「羅生門」という小説は、京の町はずれにそびえ建つ荒れ果てた羅生門の楼上で、下人と老婆が出会い、そこに一編のドラマが織り出されるという構成をとる。ここに登場する二人の年齢はどのようなものか。言うまでもないが、一人は老婆である。が、この老婆は白髪頭のわりには元気がいい。生きる気力にも満ちている。それだからこそ女の髪の毛を抜いて鬘にして売ろうなどという知恵も生まれるのである。

テクストは下人に対立する老婆を、動物を用いた比喻（直喩）で描写する。抜き出すなら以下のようなものである。

- a 檜皮色の着物を著た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。
- b 猿の親が猿の子の風をとるやうに、その長い髪の毛を一本づ、抜きはじめた。
- c 鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。
- d 匣の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。
- e 皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに、動かした。

f その喉から、鴉の啼くやうな声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝はつて来た。

g 墓のつぶやくやうな声で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

老婆の動作（b・e）や容貌（a・c・d・e）や声（f・g）が、巧みに表現されている。異常な姿や行動や不気味な音声が伝わってくるかのようだ。

一方、下人の年齢はどうなっているのか。テクストには、その年齢は書き込まれていない。おおざっぱに見て、壮年か青年かということになる。壮年と読めないこともないが、わたしはやはり青年としたい。二十代の青年である。十代とは考えられない。「永年、使はれてゐた主人から、暇を出された」とあるように、彼はかなりの期間、社会生活に従っているのである。顔には大きなきびがある。下人の若さと精力的な容貌を表現するのに、きびは実に適切な小道具であつた。そのためかこのわずかに十六枚の小説中に、なんと四度もその容貌にかかわる叙述で用いられているのである。

- a 右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。
- b 短い鬚の中に、赤く濃を持つた面皰のある頬である。
- c 右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を気にしながら、聞いてゐるのである。

d 不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛み付くやうにかう云つた。

にきびは青年らしい肉体上の現象であると同時に、右のaやcでは体面や欲求不満を示すものとしても生かされている。

下人の青年らしい若さは、「火桶が欲しい程の寒さ」なのに薄着でいるとか、その身のこなしにもうかがえる。「そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた」とは、下人が老婆の面前に姿を現す時の描写である。片足ずつでなく、両足に力を入れて一気に飛び上がるのは、活力に満ちている青年だからこそ可能なのであろう。また、老婆との対決後、奪い取った着物を脇にかかえ、「また、く間に急な梯子を夜の底へかけ下りた」などという表現も、身のこなしの素早さを示しており、下人の若さと思わせる。楼上の老婆の行為を見届けようとする好奇心も、これまた若さの現れである。

下人を青年と見なす何よりの要素は、ハムレット的逡巡の姿にある。To be, or not to be: that is the question. と悩むのは、青年の典型である。下人は飢え死にか盗人になるかで思い込み、逡巡しているのである。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んだる違はない。選んであれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選

ばないとすれば——下人の考へは、何度と同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかし、この「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は手段を選ばないといふ事を肯定しながらもこの「すれば」のかたをつける為に、当然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにゐたのである。

生きていくためには盗人になるほかにことを下人は知っている。が、そのことを気持ちの上で整理できずに、なやんでいるのである。「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた」は、下人におけるTo be, or not to beである。

下人が青年であるということは、以上の説明で納得できるだろう。ここに老若の対立という構図が見えてくるではないか。

#### 都鄙の対立を読む

次に「羅生門」という小説には都鄙の対立を読むことができる。雨の降る暮れ方の羅生門の下に、何故下人はいるのか。それに對する答えは、次のようになっている。

下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、当時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、

永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波に外ならない。

下人は帰る家がないのである。では、それまではどこに住んでいたのだろう。テキストは「主人の家」とあるが、そこがどこに所在したかまでは書き込まれていない。「京都の町」そのものだろうか。それとも「京都の町」の衰微の余波を受けがちの周辺の村であろうか。とにかくいま下人は、「京都の町」と外部とを分け隔てる境界、羅生門の下で雨宿りをしているのである。この身分の低い男、武士というよりも豪族に似て農業でもやっていたのではないかとも思える野人的な男は、いったいどこから羅生門までやって来たのであろうか。端的に言おう。京の町中からこの境界に来たのだろうか。それとも周辺の村、あるいは国からこの境界に来たのだろうか。事の検討はこの小説の《読み》にもかかわる。いふなれば、この男にとつての境界の意味を問うことなのである。

小説「羅生門」の原典とされる『今昔物語集』の「巻二十九 十本朝付悪行」中の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」では、男は摂津の国から「盗センガ為ニ」京にやって来たことになっている。つまり洛外から洛中に入ろうとして、羅生門という境界にたどりついたと言えようか。また、「羅生門」には下書きメモ、ノートのほかに、断片草稿が数枚ある（『国文学』昭和60・5参照）。文字通りの断片であり、初出稿以前の書きほぐしと言える。中に「交野平六は 京都へつく前の日に とうとう路用が尽きてしま

つた」とか、「交野五郎が 摂津の国から京都へ上つて来た時の事である 五郎は 鋳物師を商売にしゐた下司であるが 此頃の凶年に口を糊する事が出来なくなつたので 僅な路用を便りに 遥々 京都へ上つて来たのである」といったものを見出す。これら断片から窺えることは、主人公となる男は、当初お上りさんに設定されていたことである。

しかし、定稿「羅生門」は、主人公の過去の職業や居住地には一切ふれていない。ここに主人から暇を出された下人は、「京都」という町の共同体から放逐された者であり、京の町の入口・出口である羅生門から出て行くべき者であった」という平岡敏夫の《読み》（『羅生門』の異空間「日本の文学」第一集、昭和62・4）が説得力をもつて登場する。杉本優は平岡論を視野に入れつつ、「下人は原話にあるような外から京都にやってきた人間ではない。洛中にあつて「永年、使はれてゐた主人から、暇を出された」のだと判断したい」と言い、「荒廃、衰微した洛中に暇を出す論理が「正当」であるならば、その結果としてかつての主家に押し入ることもまた「正当」であるはずだ。下人は強盗として転生した」と洛中帰還説による下人のゆくえを想定している（「下人が強盗になる物語―「羅生門」論―『日本近代文学』第41集、平成1・10」）。下人を京の町の住人とする点では宮坂寛の《読み》も同様だ（『羅生門』論―異領域への出発・「門」（夏目漱石）を視野に入れ―（作品論「芥川龍之介」双文社出版、平成2・12・12）。

再び問う。下人は一体どこから雨の降る「暮方」の羅生門に来て、佇んでいるのか。先にわたしは、この問いかけは「羅生門」

という小説の《読み》にかかわるとした。右にあげた論者たちは、京都の町の主人の家から暇を出され、京の町の入り口である羅生門にまでやってきたとしている。それに対し、下人は京都に近い田舎の豪族の家から暇を出され、京都の町をめざして羅生門にたどりついたという考えも当然出てくる。むしろそれは二者択一の問題ではない。《読み》としては、双方とも成り立つからである。が、下人を都の住人ではなく、田舎の住人とするならば、ここに都鄙の対立という構図が読めてくる。わたしはテキストの中に下人のことばとして「今この門の下を通りかゝつた旅の者だ」とあることや、都ずれしていない彼の言動や、その情報の疎さなどからして、田舎から来たお上りさんにとることも十分可能としたい。言うまでもなく老婆は都びとである。彼女は京都の町中からこの羅生門に来ている。羅生門は彼女の仕事場であった。老婆を京都という都会の住人に見立てる第一の根拠は、情報通ということころにあるか。情報が素早く得られるというのは、都会に住む者の特権といつてもよい。老婆は髪を抜いた女について、生前太刀帯の陣に出入りしていたとか、疫病にかかつて死んだとか、京都の町と女にかかわる情報をよく知っている。

前後するが、下人が京都の町の住人だったとしたら、老婆の行為にそれほど驚かなかつたのではないだろうか。「暫時は呼吸をするのさへ忘れ」、「『頭身の毛も太る』やうに感じた」というのも、荒れ果てた都に、「旅の者」として着いたばかりに体験したことだったからとしたい。もし彼が京都の町中に住んでいたなら、羅生門楼上に「狐狸が棲む。盗人が棲む」のは、情報として分

かつていたろうから、死人の髪を抜くという老婆の行為に驚くこともなかつたはずである。下人と老婆の出会ひの重みを重視するには、都鄙の対立という構図を読み取る方が効果的だ。テキストの挑発性は、両者を都会人にするより対立的存在にとつた方が強くなる。誤解を生じないように繰り返しおくが、文学のテキストは多義的な《読み》を許容するものだから、わたしは自分の考えを絶対視するものではない。そのことは高校の国語教室においても然りである。一つの《読み》を絶対とし、他を一切退けるような指導は、国語教室の退廃につながるのである。教室での《読み》の理想は、学習者と指導者が連帯して新たな《読み》を切り開いていくところにこそある。

### 反逆の論理を読む

羅生門楼上で老婆と下人の出会いを、これまで老若・都鄙の二項対立で読むというかたちで説明してきた。その彼方にあるものとして、当然下人と老婆との《格闘》の意味が問われねばならぬ。ここで言う《格闘》とは、肉体と精神の二つをくくるめている。ここでは肉体的勝利が精神的勝利に連動しているのである。下人の勝利の内実、新たに得た勇氣とは、何であつたのか。それは生きることへの自信とでも言うべきもの、――生きるためには、回りの人々はむろんのこと、自分自身に対しても反逆しなければならぬとの覚悟であつた。ここには生きるためにはどうしたらよいのかとの問いかけが厳然として存在するのである。

下人の得た考えは、老婆の論理、その偽善的釈明と対応しながら



ら佇立する。下人は老婆との関係において、この新たな生き方、  
いうならば「反逆の論理」を自覚するのであった。

こうして、京の入口羅生門にたどり着いた旅人の下人は、その  
楼上で一人の老婆と出合い、格闘し、対話し、新たな「勇氣」を  
獲得し、飛翔したとしてよいだろう。わかりやすく言うなら、都  
の世間知に長けた老いたる女と、頼にできた大きなきびを氣に  
する田舎出の若き男が、さびれた羅生門楼上で対決し、若者が圧  
倒的勝利を得て、消え去って行くのである。

下人の行方は、誰も知らない。

教科書本文を含めて、現在わたしたちが読む対象としての「羅  
生門」は、このような一文をもつて終わっている。「行方」とは、

(一) 方角・場所である。と同時に、(二) 今後の動向でもある。(一)  
は京都の町としたい。再三言うことだが、物語の主人公下人は洛  
中から羅生門に来て、また洛中に帰っていくという「読み」も可  
能である。が、わたしはテクスト「羅生門」をより興行きのある  
ものとするため、これまでのエゴイズムや善悪の問題に加えて、  
老若・都鄙の二項対立の視点の導入が有効と考え、「読み」を進  
めてみた。その見方からすると、下人の行く方向は、同じ洛中と  
はいえ、その内実はかなり異なる。つまり、下人はそれまで住ん  
でいた京都の町へもどるのではなく、風聞でしか知らない土地へ  
新たに得た「勇氣」を抱いて向かうのである。

では(二)の今後の動向は、どう考えるべきか。それは当然のこと  
ながら、小説のコンテクストの中で問われるものと言えよう。下  
人は老婆によって持ち出された生きるための論理と闘う。老婆の

論理は、いま地方からやってきたばかりの純朴な青年の眼からす  
ると、許容することのできないものであった。彼は老婆と出会う  
寸前まで「餓死か盗人か」という課題解決に悩み、遲疑逡巡して  
いた。が、楼上の老婆の行爲を見るにおよんで、「許す可らざる  
悪」との感をもつ。しかも老婆の弁明は、世間的虚偽の典型とも  
言えるものであった。下人がそれを受け入れられないのは当然で  
ある。それだからこそ彼は老婆の長い独白が終わると、「嘲るや  
うな声」で「きつと、さうか」と「念を押し」、その着物をはぎ  
とるという行爲に出る。老婆の存在は、下人の精神を揺さぶる内  
的衝動に突破口を与えたのである。

が、実行行爲に出ることは、老婆を懲らしめるという言い聞  
きが立つにしても、結果として「引剝」という行爲が成り立つてし  
まう。「餓死か盗人か」の逡巡は、いまはつきりと「盗人」とい  
う選択がされたことになる。老婆の出現と、その生きるための論  
理は、下人に「新生」を促す起爆剤となった。むしろ下人は老婆  
のことばに同感したのでも、まして彼女の論理を取り込んだので  
もない。下人は老婆の持ち出した生きるための論理と闘争し、己  
の「反逆の論理」を獲得するのであった。「己が引剝をしよう」と  
恨むまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ」との下  
人の叫びは、老婆との闘争を経て得た下人の「反逆の論理」から  
出たものであった。老婆によって代表される世俗一般の考えは醜  
い。下人からするならば、それは言い逃れであり、偽善であった。  
下人はそれに対して闘うのである。と同時に彼は己の内なる律法  
とも闘わなくてはならなかった。

下人は老婆の着物をはぎ取り、足にしがみつこうとする彼女を死骸の上へ蹴倒した。その行為はそれまで盗むな、他者と協調して生きよとの教えに反するものとなった。老婆への敵対は、己への反逆につながった。かくて下人は若々しい行動力で〈新生〉し、〈夜の底〉へかけ下りる。そこは彼がそれまで属していた秩序ある世界ではなく、無秩序ながら活気に満ちた自由な世界であった。下人は旧き己を捨て去り〈反逆の論理〉を身にまとい、生きることを決意する。そして「黒洞々たる夜」に姿を消す。

小説「羅生門」の登場人物には、固有名詞としての名がつけられていない。下人という身分を示す語や、老婆という年齢を現す語が用いられているに過ぎない。それは「雨やみをする市女笠や揉鳥帽子」という言い方にも通じる。物語は典型としての人物を刻むのである。下人という人物に託されて描かれるのは、倫理的是非の問題ではない。精神のありようの問題と言えよう。

「羅生門」の教材としての魅力は、もはや言うまでもないことだろう。指導者は〈読み〉の多様性、文学言語の特質を十分理解し、学習者個々のテキストとの〈対話〉を尊重しながら、彼らの多様な〈読み〉を組織し、高めていきたい。指導者は学習者の〈読み〉を受け入れることで自身の〈読み〉を振り返る。学習者の新鮮な感性に裏付けられた見方は、時に指導者の制度化した〈読み〉に突破口を開く。教室の読み手の〈読み〉を大切にする時、指導者自身の〈読み〉も大きくふくらむのである。

#### 附記

本稿は日本文学協会国語教育部会第44回夏期研究集会（一九九二・八・二五、コブイン京都）での報告「教室の中の文学作品——『羅生門』をどう読むか——」をもとに構成した。

（都留文科大）